

講師の武田氏▶

▼ 法要の様子



第39号

発行所

浄土真宗本願寺派 本願寺神戸別院
〒6500001
神戸市中央区下山手通八丁目一番一号
TEL 078-3415949

モダン寺新聞

く別院だよりく

18回目の1.17に『手』を合わす

去る一月十七日(木)十三時三十分より別院三階本堂にて「阪神・淡路大震災物故者総追悼法要」が勤修されました。今年で震災から十八年の月日が過ぎ去りました。街並みは震災前の様子をほぼ取り戻していますが、心に負った傷跡は何年経っても癒えることはありません。

法要では、滝口隆誠輪番が表白の中で「今は物故されました方々の想いに心をはせ、そのご生前を偲びつつ、安養の浄土より、私共をお導きくださいますようお願い申すばかりであります。この上は、本日ご参集の有縁の方々と共に、深く如来の大悲のお心を聞き、人の世の無常をかみしめ、お念仏もろとも力強く生きて参ります。」と述べました。法要後、「東日本大震災復興に向けて」私が出来る事」というテーマで仲野遥香さん(神戸龍谷中学校)、鳴瀧梨乃さん(神戸国際中学校)、河南慎さん(神戸龍谷高校)、坂本実之里さん(須磨ノ浦女子高校)の四名が作文の朗読をされました。その中で須磨ノ浦女子高校の坂本実乃里さんは「命の大事さはもちろんですが、東日本大震災で被害に合われた方々の中には、家族や知人を失っていない人でも、自分の大切なものをなくした方、例えば、思い出のつまった家や町などを失った方々も多いだろうと思います。また、家族や友だちとの思い出の写真、小さい頃から大事にしてきたおもちゃや文房具

など、普段あまり気にかけていないものでも、それを見ると元気になるような、大事なものの。それをそっくりなくしてしまったとしたら、どんな思いがするでしょうか。私に出来る事はそれほど多くはありませんが、せめて、今、自分に与えられたものを、命をはじめ、いろんなものを大切にすることくらいはできます。すべてのものにいのちが宿っていると考えれば、どんなものもいいかげんに扱うことはできません。これからも命について深く考え、いらない命は一つもない、無駄な命は一つも存在しないということを忘れずにいたいと思います。」と朗読し、参拝者の中には涙を流しながら聞いておられる方もおられました。

朗読後は、「いのち」を考える研修会が行われ、講師にテレビでもお馴染みの武田邦彦氏をご講師に迎え「環境・原発と未来のエネルギーについて考える」と題し、ご講演を頂きました。武田氏は講演の中で、「阪神・淡路大震災、東日本大震災のような地震は予期することができない。しかし、全国的に警戒することが重要」と、述べられ私たちも常日頃からそのような事態に備えての準備が必要であるということを考えさせられました。

また、武田氏が執筆された本も販売され、買い求めた参拝者は記念に武田氏との握手会が行なわれました。

親鸞聖人のご遺徳に・・・

去る十一月二十七日（火）～二十九日（木）の三日間神戸別院本堂において、報恩講法要が勤まりました。報恩講法要は、宗祖親鸞聖人のご恩徳を報謝し、真宗の門徒にとって一番大切な法要です。

その報恩講の始まりは第三代覚如上人が、親鸞聖人三十三回忌にあたる永仁二年（一一九四）、『報恩講式』を作り法要の次第を定め、祖徳を偲ばれたことによります。そして、翌三年には『善信上人絵』（のちの『本願寺聖人親鸞伝絵』二巻）を著わされ、さらに正平十四年（一二九五）、存覚上人が『嘆徳文』を著わして祖徳を顕彰されました。さらに、蓮如上人の明応五年（一四九六）の御正忌報恩講から、御絵伝を奉懸し『御伝記』（一般には『御伝鈔（ごでんしょう）』と呼ぶ）を拝読して、聖人を追慕し恩徳を報謝するなりとなりしました。本山では、毎年一月九日逮夜～十六日日中までの七昼夜の間お勤まりになります。

別院でも三日間で多くの参拝をいただきました。二十八日には本堂外陣に用意していた椅子が足りない程のご参拝を頂きました。

今回の別院の報恩講法要では、参拝された皆さんが一緒にお勤めをしていただけるように、正信偈を中心とした作法でお勤めが勤まりました。

毎座の法要ごとに、祖師前（本堂内陣の親鸞聖人の御影の前）にて、輪番が焼香をして、親鸞聖人のご遺徳にあためて、参詣者一人ひとりが思いを寄せました。お勤めが始まると、堂内には正信偈を称える皆さんの声が響き渡りました。



法要の様子

また、今回より初めて毎座法要の最後には各教化団体の代表者に焼香をしていただきました。その後、ご講師の藤榮行信師（淡路組宣徳寺）より、ご法話をいただきました。

法要後は、兵庫教区仏教婦人会と兵庫教区寺族婦人会・門徒推進委員による〈仏教讃歌の集い〉が行われました。参拝された皆さんも日頃はあまり馴染

のない仏教讃歌を婦人会の皆さんと一緒に大きな声で歌っていました。



『仏教讃歌の集い』

引続き午後五時より初夜法要があり、宗祖親鸞聖人のご生涯を記した『御伝鈔』が拝読され、皆さん宗祖親鸞聖人のご遺徳を偲ばれました。

二十八日は、午前七時よりお晨朝（お朝事）、午前十時より日中法要が正信念仏偈作法のお勤めでありました。



満堂の中でのお勤め

この日は三日間の中でも一番参拝の

方が多く、二百五十名近いご参拝を頂きました。

法要後は、毎座ご法話があり、ご講師は増井浄見師（赤穂北組浄蓮寺）にお越しいただきました。また、中日の昼食には別院の仏教婦人会の皆さんが作られた〈お斎〉を参拝された皆さんが一階ホールにて召し上がられました。



『お斎』を美味しく頂きました。

午後からは逮夜法要が勤まり、午前中同様に多くの参拝をいただきました。また、この日は午後四時半より帰敬式がありました。

帰敬式とは、ご本尊である阿弥陀如来・宗祖親鸞聖人の御前で浄土真宗の門徒としての自覚をあらたにし、力強く生きていくことを誓う生涯でただ一度の大切なお式で「おかみそり」とも言います。帰敬式を受けられた方には、「釋○○」という法名が授けられます。「法名」とは、阿弥陀如来に帰依し、浄土真宗門徒になられた人に授けられる

仏弟子の名前です。浄土真宗のみ教えは、みな等しくお浄土への道を歩ませていただくという教えですから、「釋〇〇」の法名以外に位号などは、必要ありません。受式された皆さんは真宗門徒としての自覚をあらたにされ、これからの人生を力強く生き抜かれることでしょう。



『帰敬式』の様子

本堂での帰敬式中、一階ホールでは奉仕布教が行われました。講師は津守秀俊師（神戸東組照光寺）、和仁章隆師（神戸中組教秀寺）、大勢智行師（網干組圓通寺）、布埜昭憲師（赤穂北組浄光寺）の四名のご講師よりご法話を頂きました。

午後六時から初夜法要が勤まり、引き続き多田満之師（赤穂北組西光寺）によるご法話がございました。帰敬式が行われたため遅い時間の法要でしたが、多くの方がお聴聞をされました。

三名よりご法縁

二十七日（火）日中法要（二十八日（水）晨朝法要まで藤榮行信師（淡路組宣徳寺）にご法話を頂きました。

ご法話の中で藤榮師は、「人間には常に表と裏が存在する。若いという表には老いという裏が存在し、健康という表には病気になるとい裏が存在する」と話され、生きていく中での『無常』というものについて語られました。



語るように話された藤榮師

また、私たちにとって究極の依りどころとは何か。

それは『他力』であると話され、私たちが最後にたどりつく所は『浄土』であり、それは私たちの力ではどうすることもできないことで、阿弥陀さまのおはたらきで私たちは浄土へ生まれさせていただき、その阿弥陀さまの願いの中に私たちの歩むべき道は示されている、と力強く話され、参拝者の皆さんも親鸞聖人のご遺徳を偲ばせていただきました。

二十八日（水）日中法要・大連夜法要は増井浄見師（赤穂北組浄蓮寺）よりご法話を頂きました。ご法話の中で、「皆さんがこの報恩講さんにお参りを頂いているという事は、尊い『おみのり』に出会われているという事です。」



優しく話される増井師

と話されました。また、親鸞聖人は四回お名前を変えられていらつしやる。これはこのことによつて、お念仏の教えが深まっていかれたとも伺わせていただけるし、人生の節目でお名前を変えられるということは、親鸞聖人ご自身に大きな変化があったのではないかと語られ、さらに「先ほどお勤め中心で輪番が七条を付けてお勤めされていたが、あれは『お経』を背負っておられる姿なのです。『正信偈』にも「依修多羅顯真実」とあるように、親鸞さまもお経によつて真実を顯すと云っておられる。私たちがお勤めをさせていただくという事は、そのまま教えを頂くことです。」とのお味わいをいただきました。

二十八日（水）初夜法要（二十九日（木）満日中法要は多田満之師（赤穂北組西光寺）よりご法縁を頂戴しました。

多田師はご法話の中で現代の問題点に触れられ、昔は家庭の中に宗教というものは当たり前のように存在していた。しかし、今は家庭の中から宗教が無くなる時代がすぐそこまで来ている。この課題にお寺も門徒も真摯に受け止める必要はない、と話されました。また、私たちにとって一番大切な『お念仏』の教えを伝えようとしているときに子供がいないという現状が今続いている、と重ねて述べられました。



熱く話される多田師

過去からの命の功績をたどると数多くの先祖があり、その功績があつて今の『わたし』がある。先祖崇拝ではなく、私がどう生きていくか。

限りあるこの命。その命を生きていく中で『南無阿弥陀仏』のご本願に遇えた。『尽十方無碍光如来』『南無不思議光如来』の大きなはたらきに遇つて、往生浄土の間違ひのない人生に出会わせていただく、とご法話の最後を締めくくられました。

第一土曜仏教講座

二月二日(土) 午後一時半より、神戸別院一階ホールにおいて第一土曜仏教講座が行われました。ご講師は、大阪教区中島東組瑞松寺ご住職・淡路介護老人福祉施設ビハール施設長でもある野村康治師をお迎えいたしました。

野村師は講座の中で、「今はお通夜に出勤すると葬儀社の人が控え室に案内をし、時間になると会場へ案内されるが、昔は家族の控え室に行つてご遺族の方とお話をする時間があった。今はそういった事が無い。私たち僧侶は、亡くなられたご遺族の方と亡き方のお話をさせて頂くことでお育てを頂くんです。現在はそのお育てを頂く場所が無くなりつつあり、これは誠に悲しいことです。」と話されました。



身振りを交えての野村師

今回の講座で、改めて私たちが悲しみをご縁として、私自身をお育て頂く尊い仏縁に出会わせて頂いているという事を実感いたしました。

お彼岸とは

私たち僧侶は、春と秋の二回『お彼岸』の時には多くのご門徒のお宅にお参りをさせて頂いております。では、いったい『お彼岸』とはどのような思いでお迎えさせて頂いただけばよいのでしょうか。

そもそも『お彼岸』とは、インドや中国にはなく、日本で始められた仏教行事といわれ、各宗とも春分と秋分の日を中心に彼岸会を修しています。京都のご本山(西本願寺)でも毎年、春と秋には『彼岸会』が勤まります。

『拝読 浄土真宗のみ教え』には、「彼岸とは、念仏の教えをいただいたものが、いのち終えて生まれていくさとの世界。仏となった懐かしい方々がおられる、阿弥陀如来の西方浄土のことである。」と、書かれてあるように先に浄土へ生まれた方々に導かれ、また阿弥陀さまの限りのない慈悲に抱かれて、この私が彼岸(浄土)へと続けた一つの道、念仏の道を歩ませていただくのです。ですから、私たちが『お彼岸』をご一緒に迎えさせて頂いたく、お勤めさせて頂いたく事は、尊い仏縁に出会わせていただくことに他ならないわけです。

共にお念仏を喜ばせていただき、そして、亡き方がお示しをくださった『お念仏の道』をご一緒に歩ませていただきますように。

仏教婦人会報恩講

本願寺神戸別院仏教婦人会では、毎年一月二十日に報恩講をお勤めいたしております。

本年も、三階総会所においてお勤めされました。当日は総会所の上卓・前卓に打敷を掛け、別院仏婦の方が持つて来られたお供物・また当日作られたお齋をお供えさせて頂きました。お斎は別院職員お下がりとして美味しくいただきました。

午後一時半より、滝口輪番調声の下、『正信偈』を皆さんと一緒に勤めました。

お勤め終了後は、滝口輪番より法話がありました。



熱心にお聴聞される仏婦会員

別院行事予定

三月

第一土曜仏教講座

二日(土) 午後一時半より

◇講師 ◇山口教区 本願寺派司教 武田 晋 師

別院仏婦定例法座

七日(木) 午後一時半より

◇講師 ◇六粟組 安楽寺 黒田 真 隆 師

常例法座

十五日(金)・十六日(土) 午後一時半より

◇講師 ◇阪神西組 善教寺 赤井 智 顕 師

春季彼岸会

十九日(火)～二十一日(木) 午後一時半より

◇講師 ◇滋賀教区愛知下組西光寺 森 本 寛 修 師

編集後記

本年もどうぞ宜しく願っていました。年は明けてもまだまだこれから寒い日が続きます。どうぞお体ご自愛くださいませ。

(事務局 安間 慶哉)